

南あわじ市文化財調査報告書 第11集

# 南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅷ

2011年度 埋蔵文化財調査

2015年3月

南あわじ市教育委員会



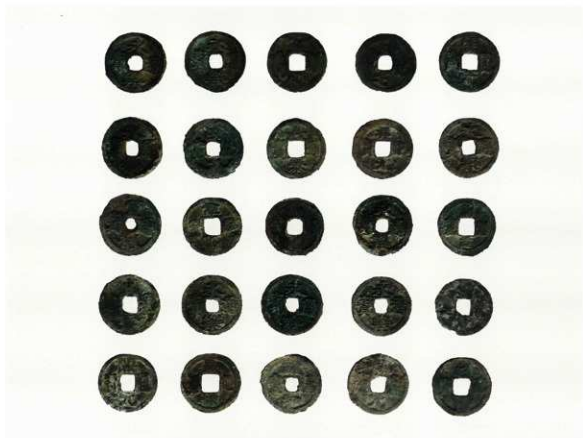
里丸山古墳群3次調査(上が北東)



里原田遺跡4次調査 8区（上が南東）



里原田遺跡4次調査 8区 出土瓦



里原田遺跡4次調査 8区 出土古銭

## はじめに

南あわじ市では、このたび平成23年度の埋蔵文化財調査の成果概要を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』として刊行する運びとなりました。

南あわじ市の埋蔵文化財調査は、平成に入り本格的に行われるようになりましたが、その大半は圃場整備事業に伴う調査です。当市は、1年を通じて温暖な気候と肥沃な農地を有する好条件が災いして、県内でも有数の農業地帯でありながら圃場整備を遅らせることとなり、平成23年度末の圃場整備率は約46%（兵庫県77%、淡路島41%）で、28年度末には達成率目標50%をめざし現在も圃場整備事業が盛んに行われています。

埋蔵文化財保護行政にとっては、まだまだ開発事業に伴う発掘調査中心の厳しい状況であります。一方で発掘調査によって新たな遺跡の発見など、歴史を紐解く発見や知見が増加し、色々な時代における当地の重要性が一層明らかになることは、誠に喜ばしいことです。

少子高齢化、過疎化が努力の甲斐なく急速に進展している地方にあって、より高い文化水準で魅力ある地域づくりをめざすとともに、郷土愛を育むうえで地域の歴史をより明らかにし、後世に継承していくことが、今を生きる我々の重要な責務と認識しており、埋蔵文化財調査の必要性を実感しています。

今回刊行いたします年報は、淡里地区と阿万木庄地区の圃場整備に伴う発掘調査を行い、カマス遺跡や甲丸山古墳群の新たな発見など、5つの遺跡調査から多くの成果を掲載しています。当年報は調査概要であるため十分な資料ではございませんが、今後さらなる努力により地域史の解明と当市の文化財保護に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、厚くお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会

教育長 岡田昌史

## 例言

1. 本書は南あわじ市教育委員会が2011（平成23）年度に実施した、埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査は南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貴・定松佳重・的崎薫が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治田力・垣脇美奈子・近藤紀子・島崎美佐代・白川裕・富岡美早子・豊田重希子・濱本善美・樹本早苗・松下矩之・三宅清子が行った。
4. 本書の編集は山崎が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、下記の方のご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。（敬称略）  
伊藤宏幸・浦上雅史・岡本一秀・小谷徳彦・金田匡史・中村弘・森岡秀人

# 目 次

## 巻頭写真図版

## はじめに

## 例言

第1章 埋蔵文化財事業の動向	1
第2章 埋蔵文化財調査の成果	
第1節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図	2
第2節 主な埋蔵文化財調査の成果	
1 養宜館跡（3次調査）	3
2 里丸山古墳群（2次調査）・里原田遺跡（3次調査）	5
3 井手田遺跡（4次調査）	9
4 里丸山古墳群（3次調査）	13
5 里原田遺跡（4次調査）	19
6 カマス遺跡（2次調査）	31

## 第1章 埋蔵文化財事業の動向

平成23年度は確認調査5件、本発掘調査4件を実施した。確認339.3㎡、本発掘5,471.4㎡で調査面積合計が5,810.7㎡となり、発掘調査面積は微増傾向にある。年度内に本発掘調査を終了させる必要から、臨時職員2名の中途採用を行った。

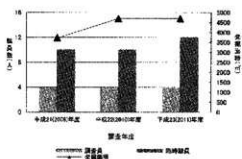
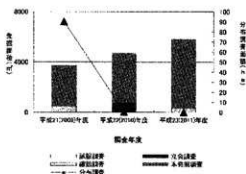
発掘調査は、前年度からの継続事業である経営体育成基盤整備事業の阿万本庄地区、湊里地区、特定環境保全公共下水道事業（八木榎列7号管渠布設工事）と新規事業である市道秋葉道2号線道路新設事業（阿那賀丸山地区）、民間事業2件を行った。

特筆すべき調査成果としては、湊里地区では前年度の甲丸山1・2号墳に続き、3～13号墳の発掘調査を行い、里原田遺跡で平安時代と思われる寺院関係の遺構・遺物が確認された。

年度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							調査員	臨時
平成21(2009)年度	90.0	0	0	500.0	3,213.3	3,713.3	4	10
平成22(2010)年度	0.354	746.5	0	10.0	3,933.5	4,690.0	4	10
平成23(2011)年度	0	0	0	339.3	5,471.4	5,810.7	4	12

\*単位:分布調査(ha)調査面積(㎡)臨時の職員数はその年度のべ人数

調査量と職員数の推移 1



調査量と職員数の推移 2

啓蒙普及活動としては、4月に前年度に発掘調査を実施した甲丸山1・2号墳の現地説明会を行った。5月には倭文小学校と松帆小学校での出張授業、トライやるウィークで三原中学校から生徒3名の受け入れを行った。8月には里丸山3～13号墳の現地説明会、夏休み期間中の小学生を対象とした『わんぱく塾』では、市内4会場で勾玉作りと兵庫県立考古博物館へバスツアーを行った。

展示活動としては、平成21年の1～3月にかけて『発掘調査速報展—平成21・22年度調査』を市内4会場で開催した他、教育委員会が所在する西淡公民館ロビーにおいてミニ展示を行い、年度内に計4回の展示物入れ替えを行った。

刊行物としては、上記速報展のパンフレット、『南あわじ市埋蔵文化財調査年報V』、『久保ノカチ遺跡』報告書の発行を行った。



現地説明会の様子



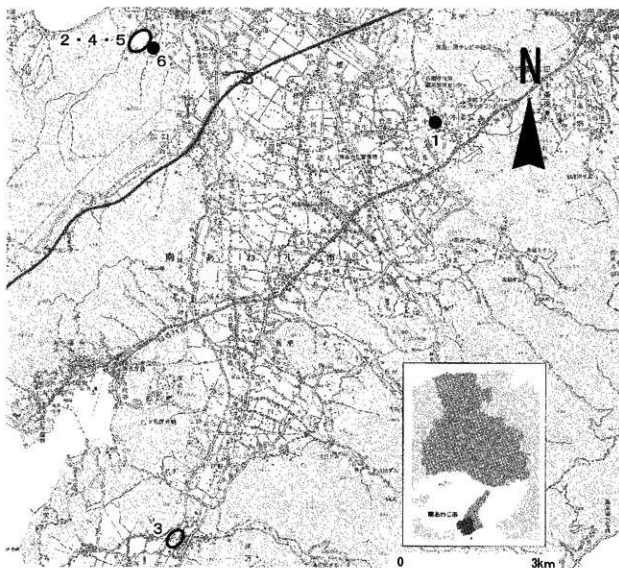
バスツアーの様子

## 第2章 埋蔵文化財調査の成果

### 第1節 埋蔵文化財調査一覧表および調査位置図

No.	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
1	特定環境保全公共下水道事業(八木種列7号管渠布設工事)	確認	5.3㎡	坂口	豊直姫跡	八木	委宜中	H23.4.25・5.31	中世の遺物確認
2	障害体育成基盤整備事業(漢里地区)	確認	300㎡	定松・的崎	里丸山古墳群・里原田	漢	里	H23.5.26～7.4	古墳と思われる石の集積と弥生時代の遺物確認
3	障害体育成基盤整備事業(阿万木庄地区)	本発掘	883.4㎡	山崎	弁手田	阿万	上町	H23.6.22～10.14	室町時代の遺構・遺物確認
4	障害体育成基盤整備事業(漢里地区)	本発掘	375.4㎡	坂口	里丸山古墳群	漢	里	H23.6.26～11.17	6世紀末～7世紀後半頃の3～13号墳確認
5	障害体育成基盤整備事業(漢里地区)	本発掘	3,034.4㎡	定松・的崎・山崎	里原田	漢	里	H23.7.5～11.27	平安～中世の竪立柱建物、へう措軒丸瓦、弥生時代終末期の土器等確認
市道秋葉道2号線道路新設事業(阿那賀丸山地区)		確認	18㎡	坂口	丸山	阿那賀	丸山	H23.9.22	遺構・遺物未確認
民間店舗建設事業(賀集八幡地区)		確認	12㎡	山崎	平松	賀集	八幡	H23.11.16	遺構・遺物未確認
6	障害体育成基盤整備事業(漢里地区)	本発掘	1,198.2㎡	的崎・定松	カマス	漢	里	H23.12.14～H24.2.9	古墳・平安時代の遺構・遺物確認
民間開発事業(松帆西路地区)		確認	4㎡	山崎	大谷	松帆	西路	H23.12.21	遺構・遺物未確認

調査一覧表



調査位置図



## 第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

### 1 養宜館跡 -3次調査-

所在地 八木養宜中字居内外  
事業名 特定環境保全公共下水道事業  
(八木榎列7号管渠布設工事)  
担当者 坂口弘貴  
種別 確認調査  
調査期間 平成23年4月25日・5月31日  
調査面積 5.3㎡ (2ヶ所)



調査の位置

#### 1 調査内容

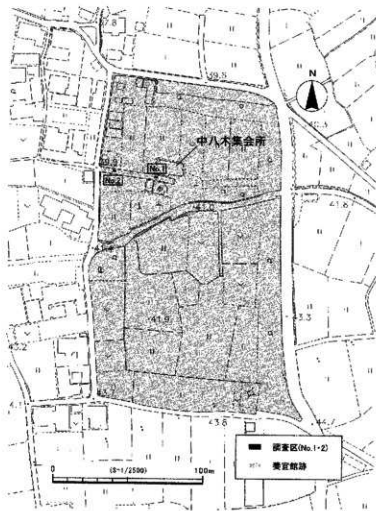
養宜館跡は、三原平野北東部養宜中地区に位置する中世の守護所とされる館跡である。現在館跡の東と北側には土塁が残り、県指定史跡となっている。今回この史跡内にある中八木集会所に接続する下水道の配管が計画され、史跡の保護と事業向立の可否を判断するため、地下の状況を確認する作業を行った。

調査地は、成相川中流右岸域の標高約40mを測る既存道路部分からなる。調査は県教育委員会と協議及び指導を得た上で、下水道配管予定地である東端と西端部分に2ヶ所調査区を設定して作業を進めていった。

以下調査区の概要を記す。

No. 1 現地盤より約10cm下に近世頃の遺物を含む礫混灰黄褐色10YR4/2土(2層)、その下に中世頃の遺物を含む礫混黒褐色10YR3/2土(3層)～礫混黒褐色10YR3/1土(5層)が堆積している。中世の遺物は比較的多く、土師器の皿類など供膳具の割合が高い傾向が認められる。

No. 2 コンクリートすぐ下に中世以前の遺物を含む礫混黒色10YR2/1土(3層)・礫混黒褐色10YR3/1土(4層)が堆積する。遺物包含層は、部分的な掘削であるが、古代の遺物を含んだ年代幅の広い層で、土師器皿



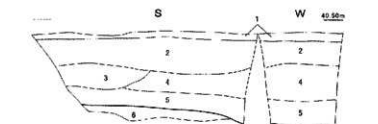
調査区設定図

など供膳具は器壁が厚く、No. 1 調査区よりも古い傾向が認められる。

## 2 まとめ

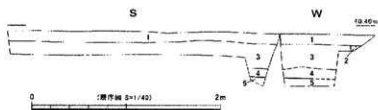
本調査により、遺構は確認できなかったものの、中世の遺物包含層を確認することができた。詳細は、今後の課題として残るが、調査面積に比較して出土遺物が多く、周辺に遺構が分布するのはほぼ間違いない、注意を要する。

(坂口)



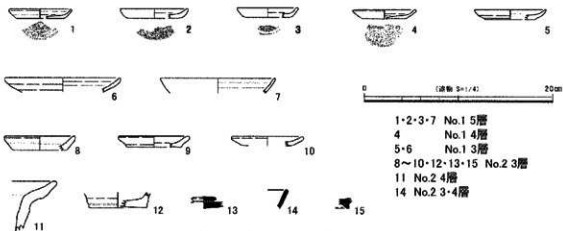
### No.1

1. 硬質灰黄褐色10YR5/2土(φ5cm以下まばらに含む)
2. 硬質灰黄褐色10YR4/2土(φ20cm以下まばらに含む)
3. 硬質黒褐色10YR3/2土(φ5cm以下まばらに含む)
4. 硬質黒色10YR2/1土(φ10cm以下まばらに含む)
5. 硬質黒褐色10YR3/1土(φ10cm以下わずかに含む)
6. 硬質暗灰黄色2.5Y4/2土(φ20cm以下多く含む)



### No.2

1. コンクリート
2. 硬質にがい黄褐色10YR4/3土(φ5cm以下わずかに含む)
3. 硬質黒色10YR2/1土(φ10cm以下まばらに含む)
4. 硬質黒褐色10YR3/1土(φ10cm以下わずかに含む)
5. 硬質暗灰黄色2.5Y4/2土(φ30cm以下多く含む)

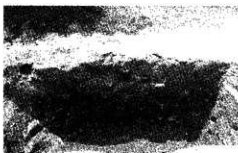


- 1・2・3・7 No.1 5層
- 4 No.1 4層
- 5・6 No.1 3層
- 8~10・12・13・15 No.2 3層
- 11 No.2 4層
- 14 No.2 3・4層

### 調査区層序図・出土遺物



調査地近景 (東より)



No.1南壁

2 さとまるやま 里丸山古墳群 - 2次調査 - さとほらだ 里原田遺跡 - 3次調査 -

所在地 湊里字原田外  
 事業名 経営体育成基盤整備事業  
 担当者 定松佳重・崎崎薫  
 種別 確認調査  
 調査期間 平成23年5月26日～7月4日  
 調査面積 300㎡ (トレンチ8本・2×3m7カ所)

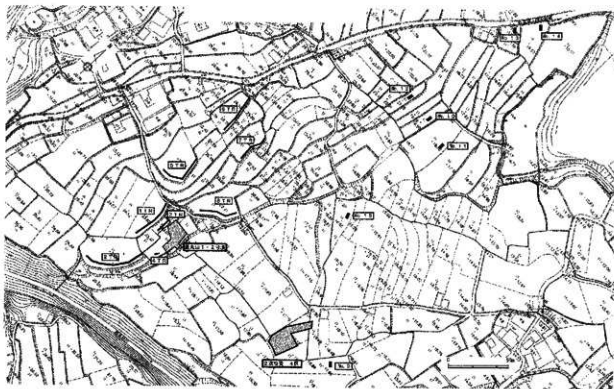


調査の位置

1 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、大日川と三原川が合流する左岸に位置する。周辺には山の口古墳や式内社である湊口神社、叶堂城跡(室町時代)、後山遺跡(弥生・平安・室町時代)、湊城跡(室町時代)等遺跡が多く立地する。

平成21年度に遺跡範囲確認調査を実施し、その結果を基に平成22年度に本発掘調査(2次調査)を実施したところ、古墳時代後期の古墳(里丸山1・2号墳)が確認されたことから、周辺に群集墳の包蔵の可能性があったため、追加の確認調査を行った。1～4トレンチは里丸山1・2号墳と同じ張り出しに、5～8トレンチは北側にある別の張り出しに設定した。また、平成21年度の確認調査において作物の植え付けなどの関係から調査を実施できなかった圃場(№9～15)も調査を行った。



調査区設定図

#### [1 トレンチ]

里丸山1・2号墳の斜面上方に設定した。北端は客土による圍場の拡張が行われており、遺構は未確認である。調査区中央より南では溝状遺構を3条確認した。遺構から遺物は出土していない。包含層からは僅かに土師器と須恵器が出土している。

#### [2 トレンチ]

里丸山1・2号墳の南西に設定した。里丸山1・2号墳と同様に古墳の築造に適した丘張り出し部にあたる。集石を5ヵ所、溝状遺構を8ヵ所確認した。群集墳の有無の確認調査であるため、集石部分は掘削していないが、溝状遺構はサブトレンチを入れて性格の把握に努めた。遺構1が円を描く溝であったため西側にもトレンチを設定したが、周溝と判断できる要素はなかった。遺構4は溝で、Ⅱ型式6段階～Ⅲ型式1段階(中村編年)頃の須恵器坏が出土している。遺構5・6は平行に走っており、横穴式石室の石を抜き取った痕跡と思われる。7～8区にかけて近接した集石2・3を確認し、集石3では明瞭な石の並びを確認した。他の集石群は等高線に直角に石の並びを確認していたが、集石5は平行に確認した。

#### [3 トレンチ]

里丸山1・2号墳のすぐ西に設定した。耕作土直下が地山であり、遺構・遺物ともに未確認である。

#### [4 トレンチ]

里丸山1・2号墳と同じ圍場の南端部に設定した。圍場造成時の客土のみで遺構は未確認である。遺物包含層が僅かに残っており、Ⅲ型式1段階頃の須恵器坏などが出土している。

#### [5 トレンチ]

2区で石列を確認したが対応する右列がなく石室とは判断しなかったが、石室の可能性は考えられる。性格は不明である。

#### [6 トレンチ]

溝状遺構を4条、土坑を2基確認したが、遺物に乏しく時代の判別は不可能である。土坑2基は切り合いが見られた。溝5は上層から掘り込まれていることや埋土から、比較的新しい遺構の可能性もある。溝6は幅1.5mの浅い溝で、土師質土器片が僅かに出土している。

#### [7 トレンチ]

土坑状遺構1基、溝状遺構3条を確認した。遺構から遺物は出土していない。遺構4は上層から掘り込まれる遺構で、埋土から新しい遺構の可能性もある。北端部では炭化物が集中して確認された。

#### [8 トレンチ]

遺構・遺物ともに未確認である。

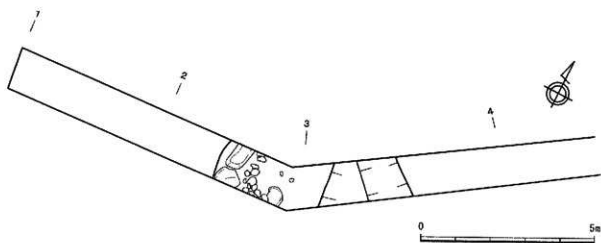
№9 壁面で溝を確認した。幅2m、深さ0.5mを測る。3層からは古墳時代初頭の二重口縁釜、溝(4・5層)からは弥生時代終末の甕や壺が出土している。

№10～15 遺物の出土は少なく、遺構は未確認である。

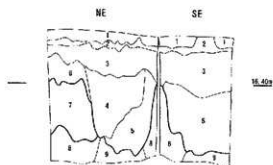
## 2 まとめ

調査の結果、2トレンチで古墳と思われる集石部分を確認した。集石1～5・遺構5・6が石室、遺構2～4・7・8がそれぞれに付随する周溝になると思われる。また、4トレンチからは2号墳と同時期の7世紀前半の須恵器が出土しており、2・4トレンチ周辺に古墳群の包蔵が想定される。

平成22年度の本発掘調査（2次調査）4区では、段丘ドで弥生時代後期～古墳時代の上器が多く出土しており、段丘上に展開していた遺構を削平して盛土を行ったためと考えている。4区の東部に位置するNo.9で確認した溝状遺構は削平を免れた遺構であり、これまでの調査では確認できていないが周辺に弥生時代終末期の生活遺構が存在する可能性は高い。  
(定松・的崎)



5トレンチ 平面図



1. 黄褐色10YR4/6粘質土+2層
2. 黄褐色2.5Y5/3粘砂(小腐り雑まばらに含む)
3. にぶい黄褐色10YR5/3粘砂質土(Mn・遺物含む)
4. オリーブ褐色2.5Y4.5/4粘砂質土(遺物含む)
5. オリーブ褐色2.5Y4.5/5粘砂質土(遺物含む)
6. 暖湿黄褐色2.5Y5/3粘砂質土(φ5cm以下腐り確含む)
7. 黄褐色10YR5/6粘土+灰黄褐色10YR6/2粘土
8. 暖湿にぶい黄褐色10YR5.5/4粘質土+灰黄褐色10YR6/1粘土  
(φ15cm以下様・腐り確含む)
9. 暖湿暗灰黄色2.5Y5/2粘質土  
(遺物・φ15cm以下様・腐り確多く含む、湧水)

No. 9 層序図



集石 1 (南東より)



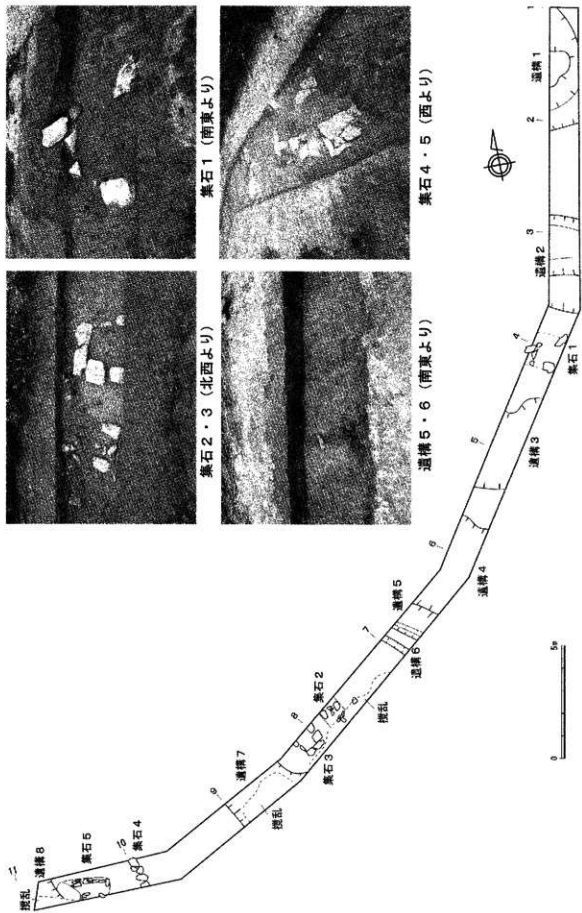
集石 4・5 (西より)



集石 2・3 (北西より)



遺構 5・6 (南東より)



2 トレンチ 平面図

### 3 井手田遺跡 —4次調査—

所在地	阿万市上町字中田内
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成23年6月22日～10月14日
調査面積	約863.4㎡



調査の位置

#### 1 調査内容

当遺跡は南あわじ市の南端、塩屋川によって形成された標高1～14mの低平な沖積地から扇状地末端に位置する。調査地の北方向には中世の山城と伝えられる郷殿城跡、東方向には弥生時代後期～終末期・中世の河内遺跡、西方向には平安時代末と伝えられる塩屋古城跡や弥生～平安時代の初用遺跡などが分布する。

平成16年度の当事業に伴う分布調査により遺跡の存在が明らかになり、平成18年度には兵庫県教育委員会によって主要地方道洲本灘養集線(阿万バイパス)道路改良事業に伴う確認・本発掘調査が行われ、弥生時代～中世の複合遺跡であることが明らかになった。平成20年度に当事業に伴う確認調査(1次調査)を行い、その結果に基づき、平成21・22年度の本発掘調査(A～C地区)に引き続いて当調査(E-1・2地区)を行った。

当調査では、中世の柱穴・土坑・溝等を検出した。柱穴から掘立柱建物8棟が復元された。

建物1 母屋部分が梁行2×桁行3間で約27.7㎡、四面に庇が付属し、総床面積が49.5㎡を測る。建物群中最大規模の総柱建物である。方位はN80°Wを示す。

建物2 梁行2×桁行3間で総床面積約17.2㎡の側柱建物である。方位はN11°Eを示す。

建物3 母屋部分が梁行2×桁行2～3間で約17.8㎡、北・西側に庇が付属し、総床面積25.3㎡の側柱建物である。方位はN6°Eを示す。

建物4 母屋部分が梁行2×桁行3間で約28.0㎡、南側に庇が付属し、総床面積は約31.8㎡の総柱建物である。方位はN7°Eを示す。

建物5 梁行2×桁行2～3間で約8.1㎡の側柱建物である。柱穴の並びから建物4の底とつながっていた可能性がある。方位はN7°Eを示す。

建物6 母屋部分が梁行3×桁行3間で23.4㎡、北・西側に庇が付属し、総床面積が約40.5㎡の側柱建物である。方位はN77°Wを示す。

建物7 母屋部分が梁行2～3×桁行4間で27.5㎡、東・北・西側に庇が付属し、総床面積が約48.7㎡の側柱建物である。方位はN78°Wを示す。

建物8 梁行1×桁行2間で約3.3㎡の小規模な建物である。建物3北側の庇に柱が通ることから、同時期の建物と推定される。方位はN83°Wを示す。

#### 2 まとめ

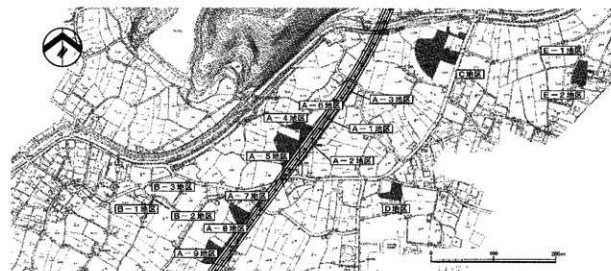
中世の建物群は方位から、①建物1・2・6・7、②建物3・4・5・8の2群に分けることができ

る。建物1と建物2、建物6と建物7が重複することから、①群内で前後関係が成立する。建物1・7には焼土を含む柱穴埋土が多く確認できたが、建物2・6には確認できなかったことから、先に建物2・6が存在し、火事による建物焼失後、建物1・7が建てられたのではないかとと思われる。②群については建物3と建物8、建物4と建物5は、柱筋が通るように建てられていることからそれぞれ同時期と考えられる。

次に建物柱穴出土遺物から時期の検討を行いたい。東播系須恵器鉢に関して、建物5出土28は口縁端部を上方に大きく拡張し、兵庫津遺跡E1類（『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2004）に近い特徴を備えるが、建物1出土1は、上方に拡張した口縁端を内側に傾ける特徴から兵庫津遺跡E2類もしくはF類に近く、後者が新しい時期である可能性が高い。また土師器皿に関して、建物3出土19・20・25は全て、口縁部に強いワデを施す特徴が久保ノカチ遺跡a1類（『久保ノカチ遺跡Ⅱ』南あわじ市教育委員会2014）と共通するのに対して、建物1出土2・5・10や建物2出土12・14は、全体を薄く、口縁端部を尖り気味に仕上げる特徴が久保ノカチ遺跡a2類と共通する。したがって②群は14世紀後半頃、①群は15世紀前半頃と推定される。ただし出土遺物からそれぞれの群内の時期差までは判別できない。

建物柱穴以外に調査地西側を中心に溝や土坑等が検出された。溝1やコの字型の溝3は良好な出土遺物はないが、②群とほぼ平行することから、②群と何らかの関わりをもつ遺構と思われる。土坑42からは、①群と同時期と思われる土師器皿32が出土している。これ以外の土坑からは良好な遺物が出土していない。

塩屋川沿いの低平な沖積地に位置するA～C地区では、12～13世紀の建物20棟に対して、14世紀以降の建物はわずか2棟であった。当調査区は扇状地あるいは山麓に位置する微高地で、14世紀後半～15世紀前半の建物が8棟検出され、集落が移動した可能性が高い。中世の阿万荘は貞応二（1223）年の『淡路国大田文』に、石清水八幡宮領として「本庄百町」と「沼嶋三町」の合わせて百三町の田が記載され、淡路国で賀集荘に次ぐ広大な耕地面積を誇っていた。その百町の田は塩屋川沿いの沖積地を中心に展開し、その結果として荘民の集落が塩屋川沿いに展開したものと推定される。当調査地の南約150mには亀

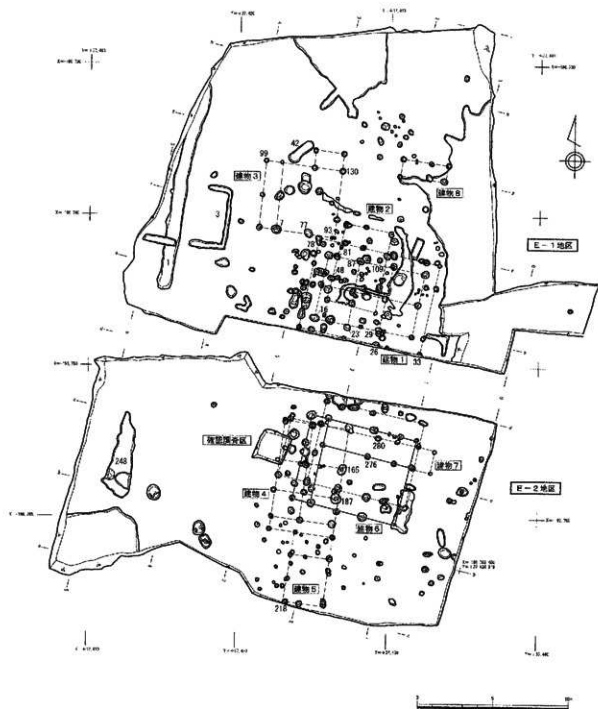


調査区設定図

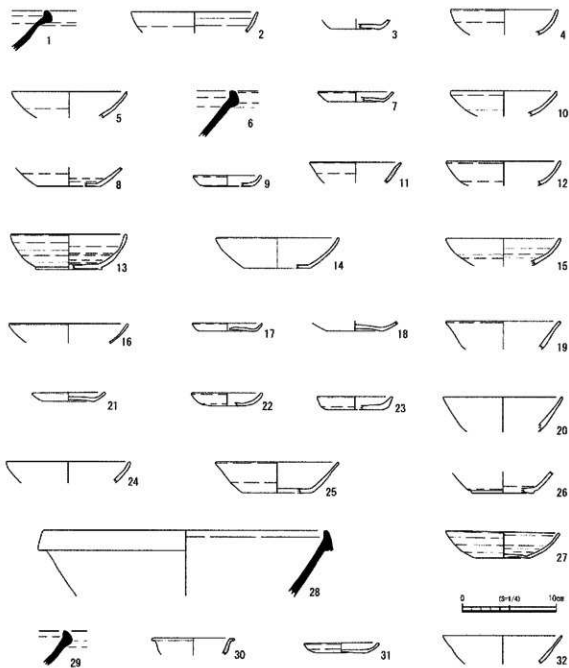


岡八幡神社があり、周辺が「本庄」と呼ばれる場所であることは注目される。史実かどうかは不明であるが、亀岡八幡神社は貞永元（1232）年に現在の場所に移ってきたと伝えられている。亀岡八幡神社の創建後、塩屋川沿いから当調査区周辺に集落が移動し、次第に阿万地区の中心としての現集落の原型が形づくられていったと推定される。

（山崎）



平面図



建物 1

1 柱穴16 2 柱穴23 3 柱穴26 4 柱穴29 5 柱穴33 6~8 柱穴78  
9 柱穴87 10 柱穴109

建物 2

11·12 柱穴48 13~17 柱穴81

建物 3

18~20 柱穴7 21 柱穴77 22 柱穴93

建物 4

23 柱穴130 24·25 柱穴99

建物 5

26 柱穴165 27 柱穴187

建物 6

28 柱穴218 29 柱穴276

建物 7

30 柱穴280

土坑42

31·32

出土遺物

#### 4 里丸山古墳群 —3次調査—

所在地 湊里字丸山  
事業名 経営体育成基盤整備事業  
担当者 坂口弘貴  
種別 本発掘調査  
調査期間 平成23年6月28日～11月17日  
調査面積 375.4㎡



調査の位置

#### 1 調査内容

圃場面と農道部分の調査を行った。

調査地の現状は、西から東に階段状に傾斜する水田からなり、前面には柿木谷川が東方向に流れている。調査区の標高が23.88m、東側圃場の標高が20.05mで高低差が約3.8mとなる東方向に開けた段丘面の先端部に位置する。

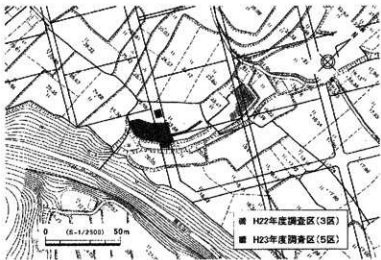
調査は、平成22年度に見つかった1・2号墳(3区)周辺で緊急に行った確認調査(2次調査)を受けて、地下の遺跡が破壊される部分を里原田遺跡4次調査5区として進めていった。また調査途中に事業者及び地元と協議を行い、3号墳・4号墳・5号墳・6号墳(石室A)・11号墳・12号墳・13号墳以外の古墳は、埋め戻しの上現状保存されることになった。

調査区の上層堆積は、調査区西側では耕作土下約4cmにベースとなる黄色系の土壌が堆積しており、東方向に向かって傾斜する。確認した遺構には、古墳13基、上坑、溝などがあり、古墳やそれに伴う周溝以外の遺構は、近世後半頃の遺構が中心と考えられ、近世以前は基本的に居住域として利用されていなかったと思われる。

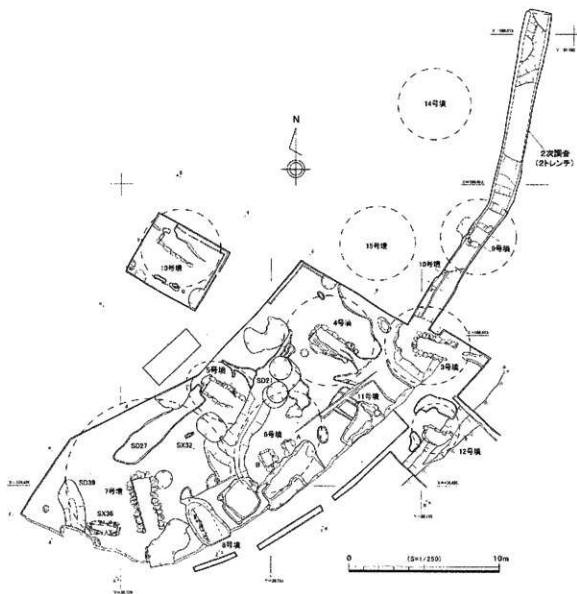
以下代表的な遺構の概要を記す。なお確認した古墳の名称は、1・2号墳に引き続き、3号墳から順に番号を付していった。

3号墳 調査区北東隅に位置する。直径約5.0～5.5mの円墳と考えられる。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で、規模は長さ2.68m、奥壁幅89cm、残存高74cmを測る。奥壁は1石で構成される。遺物は須恵器・土師器が出土しており、特に須恵器の出土量が多い。出土遺物から7世紀中頃に造られて、7世紀後半頃に造葬があったと思われる。

4号墳 調査区北寄りに位置する。直径約6.5mの円墳と思われる。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で右側壁が抜き取られている。規模は左側壁部分で残存長1.88mとなるが、復元長は3.0mあまりになる可能性が高い。復元幅約90cm、残存高25cmを測る。遺物は少ないが須恵器が出土しており、7世



調査区位置図



調査区平面図

紀中頃に造られたと考えられる。

5号墳 調査区中央西寄りに位置する。直径3.6～4.5mの円墳と考えられる。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で北側の奥壁が抜き取られている。石室北西部とSD27が一部重複する。SD27からの出土遺物は上師器の小片のみで明確な時期は不明であるが、石室の掘方を横す形でSD27が確認できており、古墳よりは新しい時代の遺構と思われる。規模は長さ2.67m、奥壁幅92cm、残存高24cmを測る。右側壁の中央部がやや胴張りになる特徴が認められる。遺物は須恵器坏身が1点出土しており、7世紀中頃に造られたと考えられる。

6号墳 調査区中央東寄りに位置する。長辺約7.0m、短辺約5.0mの楕円形の古墳と考えられる。埋葬施設は小規模な竪穴式石室が2基並列して配置される。ここでは北東側の石室をA、南西側をBとする。石室Aは南東部分が破壊されている。残存長81cm、北西壁幅45cm、残存高21cmを測る。石室Bは長さ92cm、北西壁幅60cm、残存高34cmを測る。遺物は非常に少なく、石室Aから刀子と思われる鉄片が僅

かに出土している。溝溝と考えられるSD21が西側にある5号墳を切る形で位置することから、5号墳よりも新しいと思われる。

7号墳 調査区南西部に位置する。東西幅約11mの円墳と考えられる。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で長さ3.50m、奥壁幅1.24m、残存高42～53cmを測る。墳丘規模・埋葬施設の幅が共に古墳群中最大の規模である。床面には直径約30cm以下の礫が敷かれている。奥壁側にはやや大きめの礫、入口側には小さめの礫が多い傾向が認められ、玄室部と羨道部の境界にはやや大きめの礫が1列並べられる。遺物は須恵器・土師器・鉄器・耳環・ガラス玉などが出土している。出土遺物から6世紀末頃に造られ、7世紀中頃と後半頃に追葬があったと考えられる。

また墳丘裾部に小型の竪穴式石室が2基(SX32・36)確認できた。いずれの石室も7号墳石室に直行する形で配置される。SX36は7号墳石室の約3m西に位置する。西側と南西隅の石材が抜き取られている。規模は長さ1.67m、幅24～39cm、残存高25cmを測る。東側が狭く西側が広く復元できる。SX32は、7号墳石室の約4m北東に位置する。規模は長さ47cm、幅9～15cmで北東部が狭くなる。高さは内法で11cmを測り、検出時には蓋石が残っていた。いずれの石室からも遺物は出土していないが、7号墳築造後の近い時期に造られたと思われる。

8号墳 7号墳の約4m南東に位置する。近世後半頃に破壊されており、埋葬施設は横穴式石室と思われる。右側壁のみ残存している。規模は残存長2.45m、復元幅約90cm、残存高約30cmを測る。遺物は陶磁器・瓦など近世以外のものは出土していないが、7号墳より後に造られたと思われる。

9号墳 確認調査区(2トレンチ)に位置する。奥壁と側壁の一部が確認できており、埋葬施設は横穴式石室と思われる。規模は残存長92cm、奥壁幅90cmを測る。出土遺物はない。

10号墳 確認調査区(2トレンチ)に位置する。石室を構成すると思われる石材が集中しており、幅92cmと想定される。出土遺物はない。

11号墳 調査区中央北寄りに位置する。奥壁・側壁の抜き取り穴と思われる遺構がコの字状に残る。規模は、残存長1.4m、復元幅約90cmを測る。出土遺物はない。

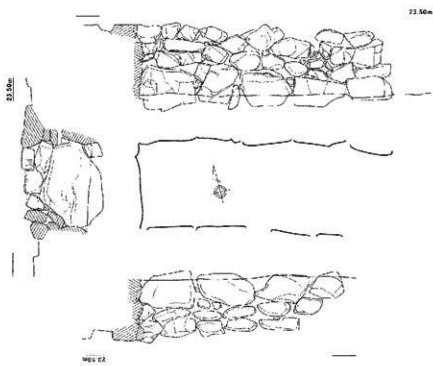
12号墳 調査区北東部に位置する直径3.0～3.5mの円墳と思われる。右側壁が抜き取られており、奥壁と左側壁が残存する。石材を立てて使用していることと石室幅から埋葬施設は竪穴式石室の可能性が有る。規模は残存長1.23m、復元幅約40cm、残存高48cmを測る。遺物は石室内から土師器甕口縁部と周溝から須恵器脚部が出土しており、7世紀中～後半頃に造られたと思われる。

13号墳 調査区北西部に位置する直径約5mの古墳である。右側壁のみ残存し、埋葬施設は無袖式の横穴式石室が想定される。規模は長さ約2.8m、復元幅約90cm、残存高22cmを測る。遺物は須恵器高杯が出土しており、7世紀中頃に造られたと思われる。

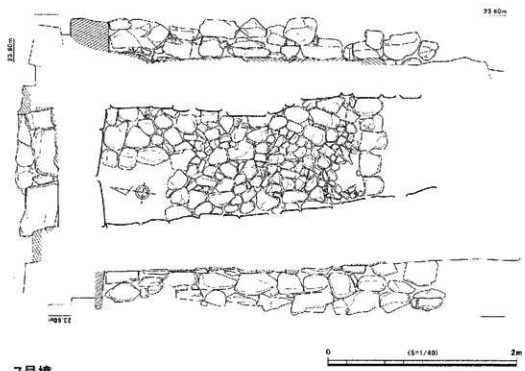
14・15号墳 本発掘調査区北側に石材が露出する部分が2ヶ所あり、それぞれ14・15号墳と呼ぶことにした。規模や時期は不明。

## 2 まとめ

本調査により、13基の古墳を確認することができた。平成22年度の成果を合わせると合計15基以上となり、古墳群を形成していることが明らかとなった。埋葬施設は無袖式の横穴式石室を中心に時期が新しくなるにつれ規模が小さくると共に小型の竪穴系の石室を採用する特徴が認められる。古墳の埋葬時期は、追葬も含めると6世紀末～7世紀後半頃におよぶと思われ、以下の変遷が想定される。



3号墳



7号墳

3・7号墳石室平面・立面図

6世紀末頃：7号墳初葬・SX32・SX36

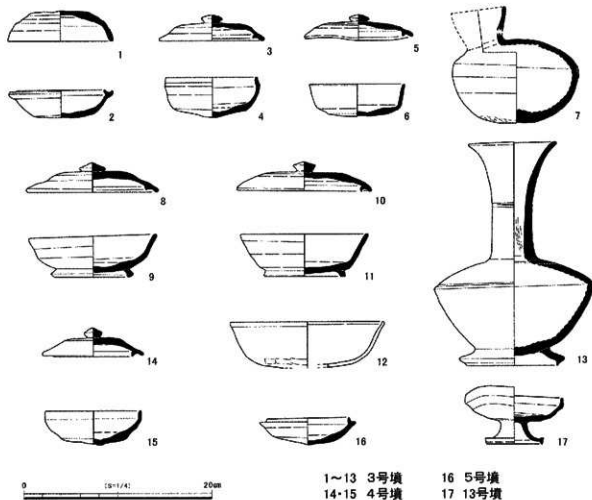
7世紀中頃：4号墳・5号墳・3号墳・13号墳・7号墳追葬Ⅰ

7世紀中～後半頃：12号墳

7世紀後半頃：3号墳追葬・7号墳追葬Ⅱ・6号墳

不明：8号墳・9号墳・10号墳・11号墳（これら4基の古墳は石室幅が約90cmの横穴式石室墳に復元されるとされることから7世紀前半～中頃の可能性が高い。）

また、未調査部分も含めると20基程度の古墳群になるとされる。現在までのところ三原平野の中で



3・4・5・13号墳出土遺物

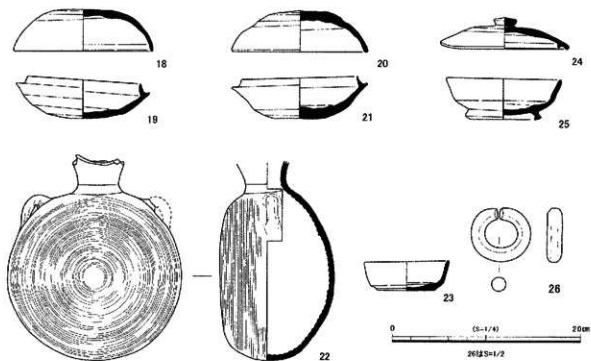


3号墳（東より）



3号墳遺物出土状況（東より）

は最大規模となり、交通の要衝である三原平野入口河辺部に位置する湊地城の首長の古墳群と考えられよう。(坂11)



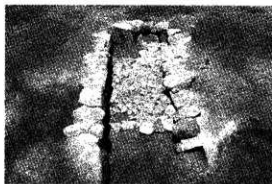
7号墳出土遺物



5号墳 (南東より)



6号墳 (南東より)



7号墳 (南より)



S X 36 (西より)



## 5 里原田遺跡 —4次調査—

所在地	湊里字原田外
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	定松佳重・的崎薫・山崎裕司
種別	本発掘調査
調査期間	平成23年7月5日～11月27日
調査面積	3,034.4㎡



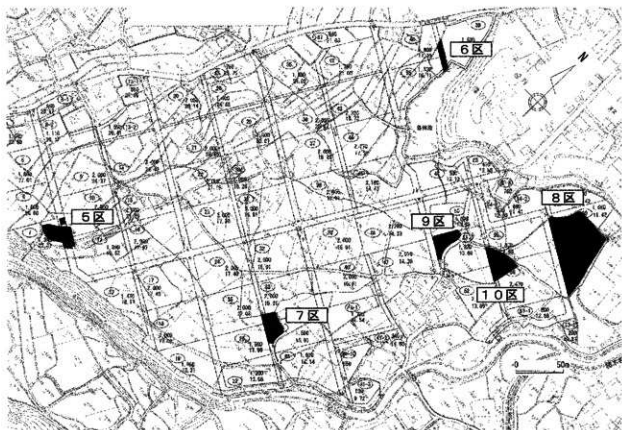
調査の位置

### 1 調査内容

本調査対象地は、淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、大日川と三原川が合流する左岸に位置する。周辺には山の口古墳や式内社である湊口神社、叶室城跡（室町時代）、後山遺跡（弥生・平安・室町時代）、湊城跡（室町時代）等遺跡が多く立地する。

平成21年度に実施した遺跡範囲確認調査の成果を基に、事業実施によって遺跡に影響の及ぶ部分の記録保存を行うこととなった。調査区番号は、平成22年度調査の調査区を引き継いで設定している。

以下、主な調査区ごとに述べるが、5区は甲丸山古墳群3次調査（p.13～18）として別に記述する。



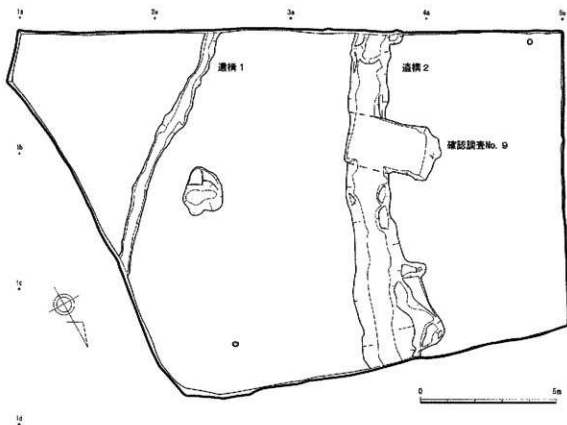
調査区設定図

[7区]

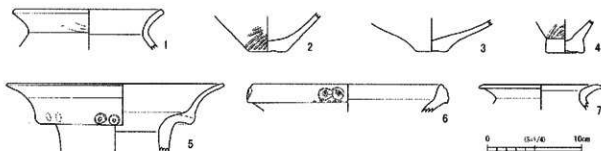
調査区中央部で南西から北東方向の溝2条を確認した。

遺構1 幅0.9m、深さ0.5mを測る。弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土した。

遺構2 幅1.5～3.0m、深さ0.5mを測る。埋没後に掘り直しがされている。遺構1と同様に弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土した。



7区 平面図



7区 出土遺物 (1.遺構1 2~7.遺構2)

[8区]

据立柱建物・溝・土坑・柵列など、遺構の密集した調査区である。

建物1 桁行4間(1間の柱間1.9m)・梁行3間(1.7m)を測る。総柱建物である。東梁行に1間、北に1間張り出す。瓦器出土。

建物2 桁行4間(1.8～2.5m)・梁行3間(1.7m)を測る。総柱建物である。瓦器出土。



8区 平面图

- 建物3 桁行2間(2.0m)以上・梁行1間(2.3m)を測る。黒色土器A類出土。
- 建物4 桁行3間(1.8m)以上・梁行2間(2.2m)を測る。瓦器出土。須恵器水瓶片5は遺構11出土と同一個体片。
- 建物5・櫓2 桁行3間(2.3・3.6m)梁行2間(1.9m)を測る。内部に床束を持つ。遺構167埋設後に建てられる。櫓2はし字形に確認した。0.8~1.7m間隔で北に面したところは3m間隔である。瓦器出土。
- 建物6 a・6 b 桁行3間(2.3m)・梁行2間(2.0m)を測る。建物6 bは建物6 aから南側1間が縮小され、柱穴を大型化した建替えが行われている。建物6 bの遺構175より波状文の中心に人物がヘラ描きされた軒平瓦6が出土した。南側軒にのみ瓦を葺いた可能性が考えられる。他に黒色土器A類出土。
- 建物7・塀1 桁行2間(2.1~2.5m)・梁行1間(2.5m)を測る。建物の南側に1.0~1.4m間隔で大型柱穴が並ぶ。板塀の可能性が考えられる。塀1の遺構14からは蓮弁文がかなり簡略化され突線化したハート型で表現された軒丸瓦7が出土した。他に黒色土器A類出土。
- 建物8 桁行3間(2.3m)以上・梁行2間(2.8m)を測る。総柱建物である。
- 建物9 桁行2間(1.6m)・梁行3間(1.3m)を測るが、東の1間は柱穴が浅いため軒支柱と思われる。
- 建物10・櫓3 桁行3間(1.9m)以上・梁行2間(2.1m)を測る。総柱建物である。建物西側に櫓3が並ぶ。柱穴316より楓文様のスタンプ文が施された軒平瓦9や蓮弁文をヘラ描きした軒丸瓦10など、瓦が多く出土する。柱穴はいずれも深く、瓦葺だった可能性が考えられる。
- 建物11・櫓5 桁行5間(2.3m)・梁行2間(2.3m)を測る。東梁行のやや南に桁に平行して櫓5が付随する。黒色土器A類出土。
- 建物12・櫓4・遺構640 桁行3間(2.0m)・梁行2間(1.8m)を測る総柱建物である。四面に庇が付く格の高い建物である。雨落ち溝(遺構640)が残存する。北側に平行して櫓4が付随する。瓦器出土。
- 建物13 桁行4間・梁行3間以上を測る。桁・梁行それぞれ両側1間ずつが2.0m、中央が1.7mと意図的に変えられており、他の建物と異なり規格性を持つ。黒色土器A類出土。
- 建物14 桁行3間(1.6~2.0m)・梁行4間(1.0~1.7m)を測る。南側2間は歪んでおり、後に建てられたと思われる。遺構640に切られている。瓦器出土。
- 建物15 桁行2間(1.8~2.5m)・梁行1間(2.7m)を測る。
- 建物16・櫓6・7 桁行3間(2.2m)・梁行2間(2.5m)を測る。北側の桁行は柱穴が大きくなり柱の通りは南側と同じであるが1間が4.2mとなって欠けており、2間分の空間は出入口があったと思われる。大型柱穴と出入口の存在から、北側からの視線を意識した造りになっていたと思われる。櫓6・7は遺構518・1060埋設後新たに建てられた区画櫓と思われる。
- 建物17 桁行3間(2.0~2.7m)・梁行2間(2.3m)を測る。総柱建物である。黒色土器A類出土。
- 建物18 桁行2間(2.0m)・梁行2間(1.8m)を測る。中央に束柱を持つ。瓦器出土。
- 建物19 桁行3間(2.2m)以上・梁行2間(2.1m)を測る。建物10に切られる。瓦の出土が多い。
- 塀2 3間のみ確認し、間隔は1.7mを測る。柱穴は大型であるが建物は構成しないため、塀とした。どの建物の付随するかは不明である。
- 遺構11・1230 ややくぼんだところを整地している。遺物は8世紀前半の須恵器水瓶や土師質土器の三足部、8角に面取りした土師器高坏の脚部や黒色土器A類が出土。

遺構19 2.2×1.15mの長方形を呈し、深さ0.25mを測る。底は平坦であるが、墓の痕跡は確認できなかった。瓦器・青磁碗・須恵器こね鉢出土。

遺構167 3.9×4.6m、深さ0.3mを測る。水を溜めた痕跡はなく、性格不明である。ヘラ描きの波状文軒平瓦46・47や淡路国分尼寺出土瓦と同文の唐草文軒丸瓦48や道具瓦45などが出土する。

遺構518・1060 西に隣接する圃場とは1.4~2.3mの高低差があり、区画溝と思われる。断面観察より深さが0.5m以上確認できる。遺構1060は調査区北端部まで続き、直角に西に曲がる。両遺構から瓦・製塩土器が出土するが、遺構1060は製塩土器（丸底Ⅳ式）が多く出土。

遺構524 座棺である。頭骨の一部と古銭25枚、青銅製の鞘を持つ刀子、土師器皿が出土した。最新銭（宣徳通寶・初鋳1433年）より15世紀中頃以降と思われる。

1	開元通寶	621年	14	永樂通寶	1408年
2	皇宋通寶	1038年	15	紹聖元寶	1094年
3	政和通寶	1111年	16	永樂通寶	1408年
4	開元通寶	621年	17	淳化元寶	990年
5	元祐通寶	1086年	18	嘉泰通寶	1201年
6	開元通寶	621年	19	祥符元寶	1008年
7	永樂通寶	1408年	20	永樂通寶	1408年
8	永樂通寶	1408年	21	永樂通寶	1408年
9	永樂通寶	1408年	22	永樂通寶	1408年
10	熙寧元寶	1068年	23	熙寧元寶	1068年
11	宣徳通寶	1433年	24	嘉祐元寶	1056年
12	元祐通寶	1086年	25	開元通寶	621年
13	嘉祐元寶	1056年			

遺構524 出土古銭一覧表

遺構905 7世紀初頭頃の須恵器坏Hが出土した。この地区の中で一番古い遺構で、この時期の遺構は他に見つかっていない。

遺構1042 落ち状の遺構である。土師器の甕が多く出土し、甕片や製塩土器も含まれていた。また、長さ3.2cmの管玉も混入していた。

遺構1100 7.4×6.0m、深さ0.15mを測る。製塩土器片が多量に出土し、一部に被熱が認められることから、ここで火力による塩生産のなんらかの作業を行っていた可能性が考えられる。

遺構1204 方形に囲うような遺構であったため堅穴建物の痕跡かと思われたが、溝が部分的に非常に深くなっていたため性格不明である。瓦器が出土していることから中世の遺構である。

遺構1314 下層より花崗岩製の五輪塔火輪70が出土した。淡路島南部は砂岩地帯であるため石造物は砂岩製が多い。よって近世もしくは近代の遺物かと思われたが、共存する土器は中世であり、鎌倉～室町時代のものと思われる。

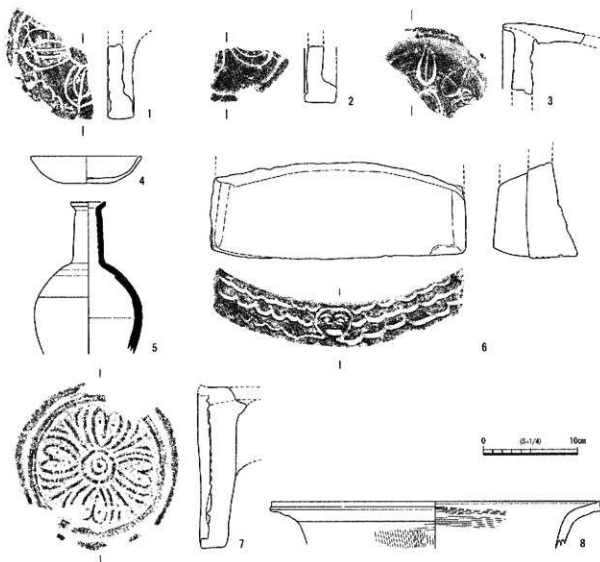
それぞれの遺構の時期区分を試みると、

遺構905（7世紀初頭）→建物3・6a・19→建物10・13・15・17・櫓3・遺構518・1060→遺構11・1230（10世紀前半）→建物8・11・櫓5→建物6b（10世紀後半）→扉2→建物7・16・扉1・櫓6・

7 → 建物14 → 建物4 → 建物2・5・18・櫓2 (13世紀前半) → 建物1・12・遺構640・櫓4 → 遺構524 (1433年以降) となる。建物9は12世紀後半、櫓1は瓦器の時期であるが、他の遺構と切り合いがなく先行関係は不明である。

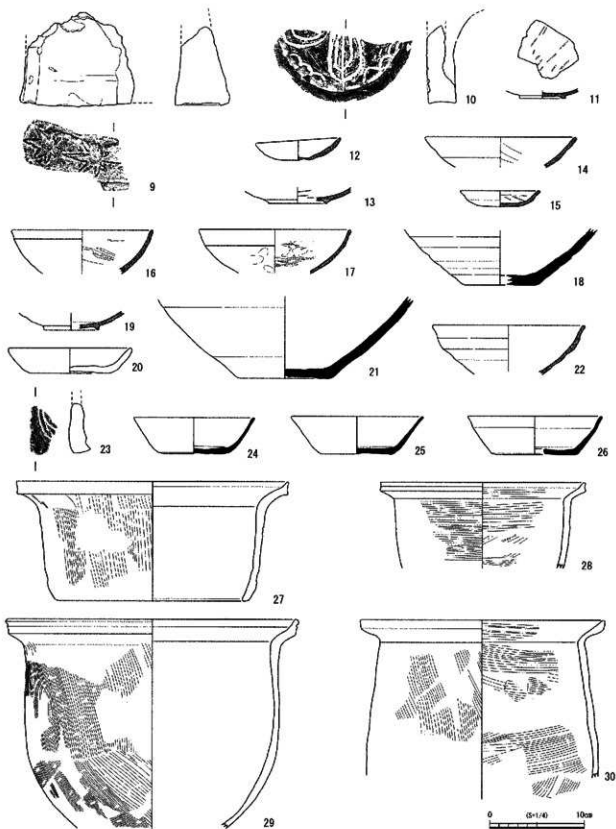
溝518・1060は間に空間があり、ここが東からの出入口とも考えられる。中世においては、庇や張り出しの敷設などから建物1・12・櫓4期が最盛期だったと思われる。

この地区の遺物の中では、軒瓦が非常に特異であり、ヘラ描きやスタンプ文、特徴的な文様の范でつくられたものばかりである。中には泥条盤築技法のように粘土紐を巻き上げて作られた「見須恵器壺」の底部と見間違えるような軒丸瓦も視られ、須恵器工人の関与がうかがわれる。また、窯壁と思われる硬質の焼土塊が数点出土しており、近辺に窯の存在が推測される。



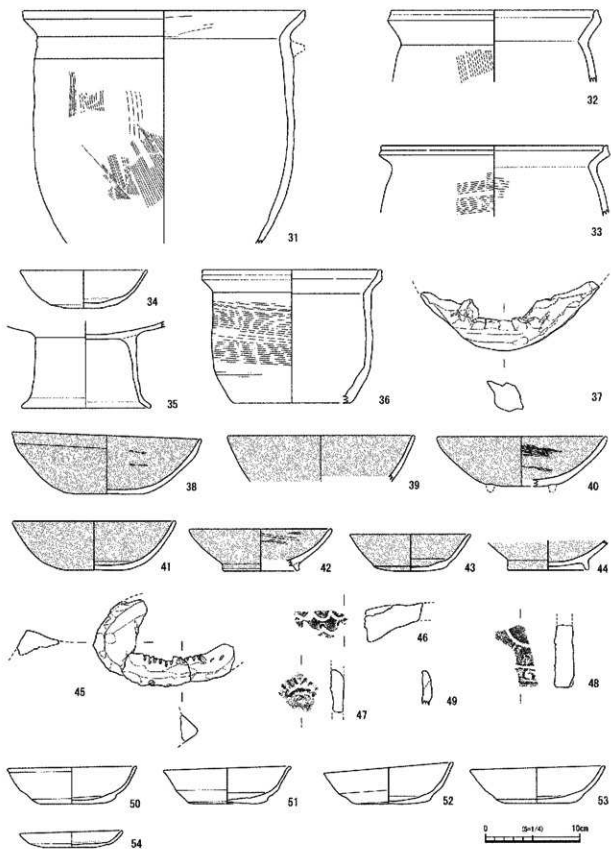
1~3. 包含層 建物2 4. 柱穴41 建物4 5. 柱穴153 建物6 6. 柱穴175 櫓1 7. 柱穴14  
建物9 8. 柱穴986

8区 出土遺物1



器物10 9~10. 柱穴316 器物12 11. 柱穴538 12~14. 遺構640 15. 柱穴603 16. 柱穴613  
 17~18. 柱穴655 器物14 19~20. 柱穴785 21. 柱穴771 22. 柱穴790 23. 柱穴669 24~30. 遺構11

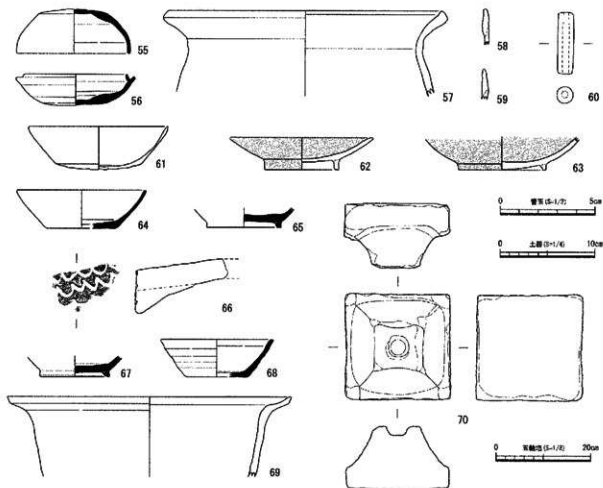
8区 出土遺物 2



31~44. 透模11 45~49. 透模167 50~53. 透模518 54. 透模524

8区 出土遺物3





55～56. 遺構905 57～60. 遺構1042 61～64. 遺構1060 65. 遺構1100 66. 遺構1204 67～69. 遺構1230  
70. 遺構1314

#### 8区 出土遺物4

##### [10区]

中世の柱穴・土坑・溝等が検出され、建物1～6、柵列1が復元された。

建物1 3柱穴が隣接することから、3回建て替えが行われたと考えられる。埋土の切り合いが判別できなかったが、後述するように出土遺物から1a→1b→1cの順に建てられたと推定される。母屋部分は梁行2間×桁行3間の総柱構造で約24.1㎡、四面に庇が付属し、総床面積が42.9㎡を測り、10区では最大である。方位はN51°Wを示す。

建物2 梁行2間×桁行2間で、北側に1×1間が付属する。総床面積は約20.5㎡の総柱建物である。方位はN32°Eを示す。柵列1が付属する。

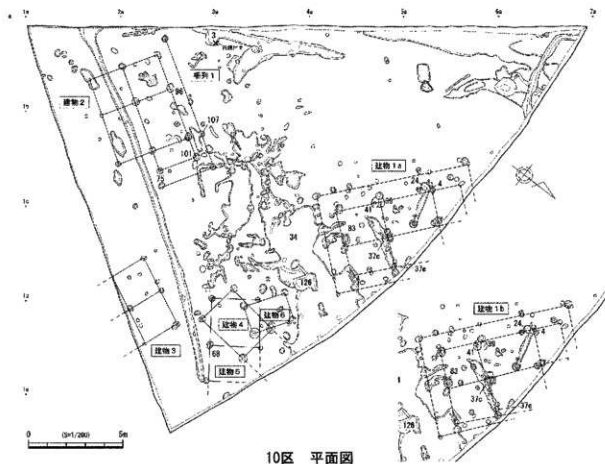
建物3 南北2間×東西1間以上の建物である。方位はN24°Eを示す。

建物4 梁行1間×桁行1間以上の建物である。方位はN8°Eを示す。

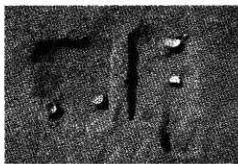
建物5 梁行1間×桁行2間以上の建物である。方位はN55°Eを示す。

建物6 1×1間の建物である。方位はN55°Wを示す。

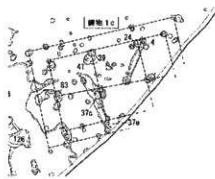
土坑126 流路状遺構34を切る。建物1と同じような方位を示す。



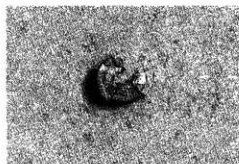
10区 平面図



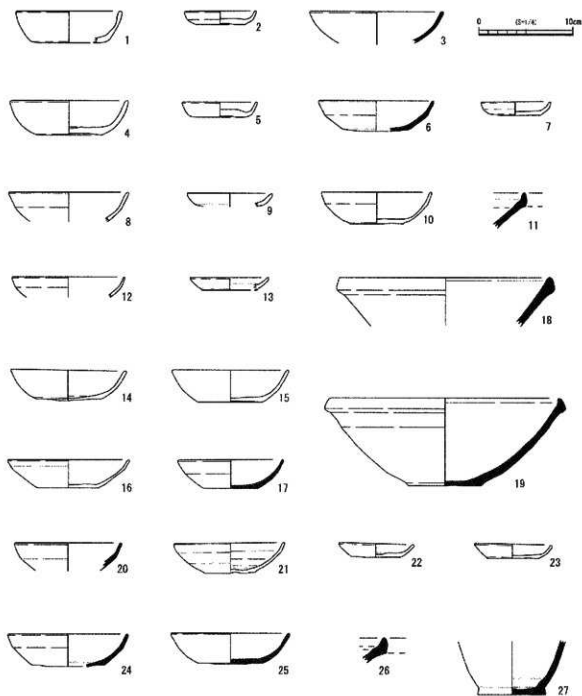
土坑126 遺物出土状況 (北東より)



溝3 古銭出土状況 (北西より)



建物1b 柱穴4 古銭出土状況 (北より)



建物 1a 1~3. 柱穴39 4・5. 柱穴37e 建物 1b 6. 柱穴37c 7. 柱穴41  
 建物 1c 8. 柱穴24 9. 柱穴83 建物 2 10・11. 柱穴75 12. 柱穴96 13. 柱穴101  
 櫛列 1 14・15. 柱穴107 建物 5 16. 柱穴68  
 17・18. 溝 3 19~23. 土坑126 24~27. 流路状遺構34

10区 出土遺物

建物1柱穴等から、比較的残りの良い供膳土器が出土している。須恵器Ⅲは口径13cm前後の3・24・25が古く、口径11～12cmで口縁部を強くナデる6・17・20が新しい様相を示し、後者は14世紀中葉～末頃の久保ノカチ遺跡a1類（『久保ノカチ遺跡Ⅱ』南あわじ市教育委員会2014）に対応すると思われる。また上師器Ⅲ8は久保ノカチ遺跡a2類（15世紀初頭～前葉頃）に対応すると思われる。すなわち14世紀前葉頃、流路状遺構34が埋め戻され、建物1a→1b→1cの順に建て替えられ、十坑126は建物1bとほぼ同時期に掘削されたと思われる。建物2・櫓列1は建物1bか1cに並行する時期と思われる。その他の建物の時期は不明であるが、15世紀後半の遺物が見当たらないことから15世紀前半には集落の終焉を迎えるようである。供膳具以外に古銭が出土しており、建物1b柱穴4からは、天聖元寶（初鋳1023年）もしくは紹聖元寶（初鋳1094年）、溝3からは大観通寶（初鋳1107年）を含む数点が出土している。

## 2 まとめ

7区では弥生時代終末～古墳時代初頭の土器を含む溝を確認した。遺跡範囲確認調査を含め、この時期の生活遺構は確認できておらず、大規模な遺構面の削平があったと思われる。

8区では古墳時代後期・奈良～平安時代・中世初頭の遺構を確認した。8区周辺は「昔は寺があり大雨が降って流された」と地元では言われており、字名を「南ノ加市」と言う。本来は「垣内」であったと考えられ、8区の遺構は何らかの施設の敷地内南部にあった建物群と思われる。特に、調査区西部からは瓦が出土していることから寺院遺構とも考えられるが、出土量が一堂分ではなく、礎石が確認できなかったことから軒先のみ、もしくは一面だけ瓦を葺いた建物であったと思われる。また、くぼ地の整地痕である遺構11からは仏具である水瓶や三足（足部分）が出土し、規模の大小はともかく寺院関連の建物があったことは明瞭である。

尾根先端部に立地する8区と同様の立地状況である後山遺跡でも、8世紀後半～9世紀前半の多量の製塩土器（丸底Ⅳ式）が出土しており、塩生産におけるなんらかの作業を行っていた可能性が指摘されていた。8区での製塩土器の出土状況を合わせると、やはりなんらかの作業を行っていたと考えられる。

10区では14～15世紀の建物が確認され、四面庇を持つ建物1は8区建物2・12に続く主要な建物であったと思われる。

本遺跡は三原平野と海への玄関口が見渡せられる丘陵部に位置し、これまでに調査された周辺の遺跡群と合わせ考えると、古来より松帆から湊にいたる地域は政治的に重要な土地であったと推定できる。

（定松・的崎・山崎）

## 6 カマス遺跡 ー 2次調査ー

所在地	湊里字カマス
事業名	経営体育成基盤整備事業
担当者	的崎薫・定松住重
種別	本発掘調査
調査期間	平成23年12月14日～平成24年2月9日
調査面積	1,198.2㎡



調査の位置

### 1 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、大日川と三原川が合流する左岸に位置する。周辺には、柿木谷川を挟んだ北の丘陵に甲丸山古墳群や山の口古墳、式内社である湊口神社、里原田遺跡(弥生～江戸時代)、湊城跡(室町時代)、三原川河口には叶堂城跡(室町時代)、南方には後山遺跡(弥生・平安・室町時代)等遺跡が多く立地する。

平成21年度に実施した遺跡範囲確認調査の成果を基に、事業実施によって遺跡に影響の及ぶ範囲のみ本発掘調査を行った。

以下、主な調査区のみ記述する。

#### [C区]

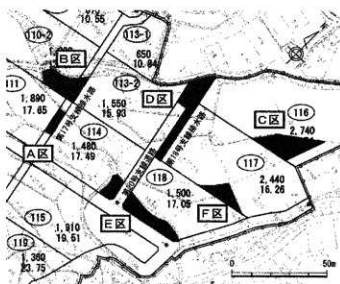
掘場面の調査である。掘立柱建物3棟と溝などを確認した。建物1は調査区の北側に続くと考えられる梁行2間の建物で、柱穴から土師器・須恵器・製塩土器が出土している。建物2は桁行5間・梁行2間で土師器が出土している。建物3は桁行4間・梁行2間で東側に庇が付く可能性が考えられる。柱穴から土師器・製塩土器が出土している。建物2・3は桁行が9.3mと同じ規模であるが、柱間は建物3の方が広く、柱穴が大きい。柱穴の切り合いから建物2→3へと建て替えが行われている。遺物がいずれも小片であるが、8世紀後半～9世紀前半と考えられる。その他の遺構からは黒色土器B類なども出土していることから、10世紀代の遺構も含まれている。

#### [D区]

排水路と道路の調査である。調査区南部で掘立柱建物1棟・柵列・土坑などを確認した。建物は桁行3間で調査区外へと続き、東側に庇が付く。建物を囲む柵列が東側と南側にみられる。建物柱穴からの遺物は乏しく、僅かな土師器と須恵器から9世紀前後と考えられる。

#### [E区]

掘場面の調査である。竪穴住居1棟と掘立柱建物1棟などを確認した。竪穴住居は1辺が4.7mを測り、北西辺中央に竈を持ち、4本柱である。古墳時代後期の土師器と須恵器が出土し、床面では鉄製品を2



調査区設定図

点確認した。建物は桁行4間・梁行2間で、桁行の柱間は0.9~1.5mと間隔が不均等で狭い。柱穴からは少量の土師器しか出土していないため明確な時期は不明であるが、竪穴住居と軸を同じくすることから竪穴住居と同時期と考えられる。包含層からは弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・瓦・石鏡・輪の羽口・石帯・耳環など弥生~鎌倉時代の遺物が出土した。石帯6は暗灰色をした蛇尾片である。耳環7は径30×27mmで重量は21.8g、中実の銅芯に金と銀の合金薄板を被せている。

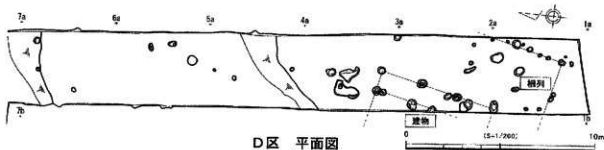
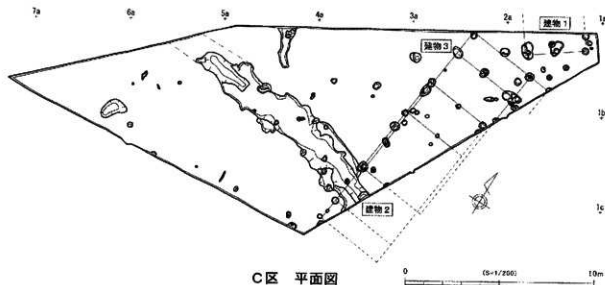
#### [F区]

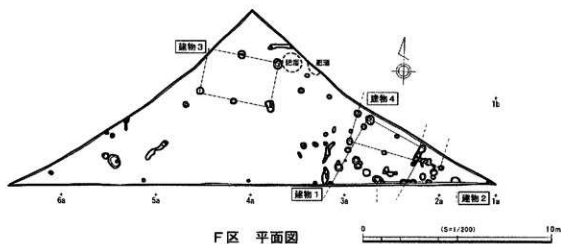
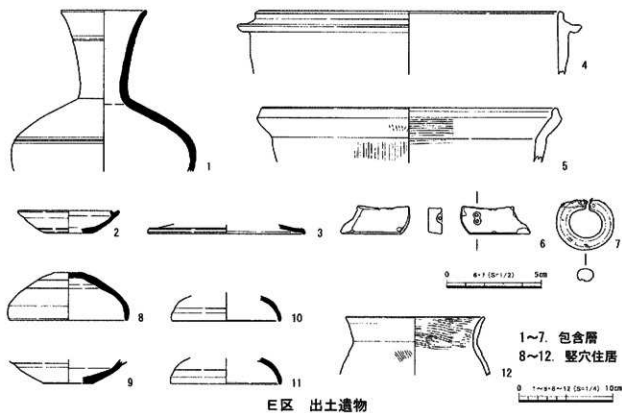
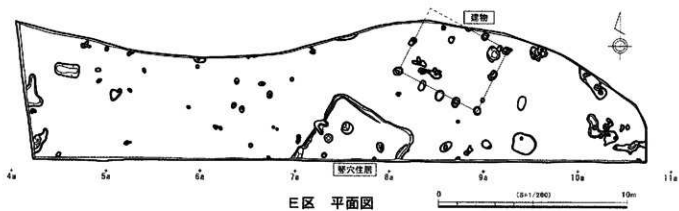
園場面の調査である。掘立柱建物4棟と土坑などを確認した。建物1は桁行2間以上・梁行2間で、上層より掘り込まれた柱穴で構成される。土師器や白磁の出土から11~12世紀と推測される。地山をベースにした建物2は桁行3間で調査区の南側に続く。建物3は桁行2間・梁行1間である。建物4は桁行2間以上・梁行2間であり、東に底を持つ。建物2~4の柱穴から時代を判別できるような遺物は出土しなかった。

## 2 まとめ

本遺跡は古墳時代後期と奈良~平安時代の遺跡であることがわかった。古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物、耳環の出土からはE区西側の丘陵に古墳が包蔵されている可能性が考えられるとともに、柿木谷川の対岸に立地する里丸山古墳群との関連性がうかがわれる。また、古代においては石帯や灰釉陶器などの官衙的要素の高い遺物が含まれていることから、同じく柿木谷川対岸に立地する里原田遺跡8区の寺院関連遺構と密接な関係があったと考えられる。

(的確・定松)





2015年3月31日発行

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅶ  
2011年度 埋蔵文化財調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衛1100

TEL. 0799-42-3849

印刷 佐藤印刷

〒656-0501 兵庫県南あわじ市福良甲1006-4

TEL. 0799-52-0049



